
あひるちゃん

発波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あひるちゃん

【Nコード】

N6848H

【作者名】

発波

【あらすじ】

友達0！家族0！で、今まで一人の環境で生きてきた見た目クール少女がいろんな人と出会いながら成長していく青春ストーリー

01*あひるとオレンジ頭

長くて黒い髪に

クールな目

そして

身長157センチ体重43キログラムの華奢な身体

性格は

見た目冷静沈着キャラで通しているが
内心は、

それがわたし。

あおやなぎ ひとみ
青柳瞳

16歳、一魅^{いつみ}高校1年をやっている

といっても

まだこれから入学式なんだけど。

一魅高校はわたしの自宅から徒歩で行けるから選んだ。
学力は普通
運動神経も普通

そんなわたしが通える学校が一魅高校だけつてのもあったりする。

つてなわけで
これから学校に出発だ

ブレザーにネクタイ

チェックの膝上スカート

どっかの学校とダブってんじゃないかって思うくらい一般的制服。
でもわたし的には
少し気に入っていたりする

瞳

「いってきます」

いつてらっしゃい、なんてもう何年も聞いてない。

新品の黒いローファーが
足を動かすたびに
歩いている音を出す

これから毎日、登下校を繰り返すこの並木道

優しい風になびく木々

心地よい。

わたしは思わず目を閉じた

と、ふいに聞こえてきた
女の子の声。

目を開けると

わたしの数メートル先に
同じ制服をきた女の子たちが2人、歩いていた

真新しい制服
多分入学生だろう

2人の女の子たちは
楽しそうにおしゃべりをしている

わたしは
その女の子たちの笑顔に
ほほえましくなった

友達ひとりだけ

家族もひとりだけ

・人じゃないけど。

わたしには
アヒルという動物がいれば生きていける。

人はこわい

アヒルはかわいい
わたしを癒してくれる

今日もわたしの携帯についているアヒルのキーホルダーが
わたしを守ってくれている

頭おかしいとか
自意識過剰なんてわかってるけど

わたしにはアヒルしかないんだ

足を動かしていると
一魅高校の校門が見えてきた

大きい門にまだ作られたばかりの大きな校舎。

今日からここがわたしの学校か。

なんかわくわくだ

まあ

友達を作らないけど

・ ・ 作れないただけけど。

校門を通ると広がる校内。
ほんと広い

たくさんの生徒が玄関へと歩いていく
わたしもそれについていく

それにしても

やけにチャラチャラしてんのか
きやぴきやぴしてんのか多いな

まさか

ここはそーゆーやつが多いの!?

なんか

この先が不安になってきた

とりあえず

校内へ入ってみた

やはり中も新しく綺麗だった

靴を履き替え、先に進んでみると
でかい紙が壁に貼ってあり自分がどのクラスになるのかが掲載して
あった

わたしは・・・

1 - A

らしい。

どんな人たちがいつしよなんだろう、

まず表の前には邪魔になるのでどう

各生徒が集まり次第

入学式が始まるため

それまでは各自教室で待機だそうなので

さっそく1 - Aの教室にいつてみよ

各学年4クラスあり

1年は一階の教室を使っらしい

1 - Aは
一番端の教室だ

それにしても
掲載物がたくさんある

ほとんどが部活の部員募集ポスターだが。

部活か、何にはいろうかな

中学んときは
帰宅部だった

なにかしたいってわけじゃなかったし

あ

ここだ

1 - A。

今日から1年お世話になる教室

わたしは

一歩、教室の中に踏み出した

と

その瞬間にざわつく教室内。

・・・やだなー（ - - ; ）

なんか言われてるのかな

前を向けなくなった

こわい

みんなの視線がこわい

あひるちゃん助けて、

「ん？教室、入んねえの??」

瞳

「あ、」

わたしは
入り口を塞いでしまっていた

わたしは
その人に頭を下げすばやくそこから動き

自分の番号が貼られてある机を探した

周りの音なんてきこえなかった

その人の顔すら見れなかった

内心臓が飛び出そうなくらいドキドキしていた

なんかこれだけでつかれたな

家帰りたい

そんなことを考えながら
自分の机発見

一番後ろの窓側だ

よかつた

一番前とかは人の視線がこわいから
だめだ

それにここは景色がいい

座ってみよう、

空が綺麗

気持ちが落ち着く

「なあ！さっきはごめんなっ！びっくりしたか？」

そいつは

わたしの席の前に座っていた

いきなり声をかけられ
わたしは言葉が出ない

そして

なんなんだこいつは。

オレンジと黄土色がまざった感じの髪の毛

ワイシャツは全開で
赤のＴシャツ

笑顔は・・・爽やかだ

「なんか俺の顔についてる?？」

こんな色の人間初めてみた

瞳

「……………」

なんてしゃべれるわけねえだろ！！！！

せつかくしゃべってきてくれたのうれしいけど

なんか企まれてたらいやだし

「んな警戒すんなって！ あ、俺一ノ宮 爽いちのみやそうって言うんだ。よろしくな」

名前と笑顔が合ってる人だ

この人、なんか悪い人じゃないかもしれな

爽

「お前は？」

瞳

「・・・」

声が震える！……

爽

「お前ほんとクールなやつだな」

と、また笑顔。

って

こっちは必死で・・・！

爽

「・・・大丈夫、俺そんな悪いやつじゃないから！」

また笑顔。

なんだろう
この人。

大丈夫、その言葉に安心した

爽
「手え震えてる」

彼が指差す先には
わたしの手。

震えてた

感情が手に表れてたのか

爽

「クールなふりして実は慌てるタイプだろ」

今度は歯を出してニツて笑った

この人に丸解りされてる；

とりあえず

うなずいてみよ

爽

「ははっ！お前わかりやすいもん！」

わかってくれたのあたしかいません；

こつゆう人間もいるんだなって初めて思えた

爽

「で？お前の名前は？」

わたしは

瞳

「青柳瞳。」

爽

「！」

——そういつて彼女は優しく笑った

俺の頭から焼き付いて離れなかった。

あひるちゃん
わたしがんばるね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6848h/>

あひるちゃん

2010年11月17日14時33分発行